文字畫圖 讀而見

明

下

今昔續百鬼巻之下

鵺

鵺ハ深山にすめる化鳥なり 源三位頼政 頭ハ猿 足手ハ虎 尾ハくちなハ乃ごとき異物を射おとせしに なく聲の鵺に似たれバとて ぬえと名づけしならん

以津真天
廣有いつまで〱と鳴し
怪鳥を射し事
太平記に委し

邪魅

邪魅ハ魑魅の類なり妖邪の悪氣なるべし

魍魎
形三歳の小児の如し色ハ赤黒し目赤く
耳長く髪うるはし
このんで
亡者の肝を食ふと云

貉

貉の化る事多く狐狸におとらず。ある辻堂に年ふるむじな僧とばけて六時の勤おこたらざりしが食後の一睡にそれを忘れて尾を出せり

野衾

野衾ハ鼯の事なり形蝙蝠に似て毛生ひて翅も肉あり四の足あれども短く爪長くして木の実をも食ひ又ハ火焔をもくふ

野槌

野槌ハ草木の霊をいふ
又沙石集にみえたる
野づちといへるものハ
目も鼻もなきものといへり

土蜘蛛(つちぐも)

源頼光土蜘蛛(くも)を退治(たいぢ)し給ひし事は児女(ぢよ)のしる所也

比々（ひゝ）

狒々は山中（さんちう）にすむ獣（けもの）にして猛獣（まうじう）をとりくらふ事鷹（たか）の小鳥をとるがごとしといへり

百々目鬼
函関外史云ある女生れて手長くしてつねに人の銭をぬすむ忽腕に百鳥の目を生ず是鳥目の精也名づけて百々目鬼と云外史ハ函関以外のことをしるせる奇書也
一説にどゞめきハ東都の地名とも云

震々（ぶるぶる）

ぶるぶる又ぞゞ神とも臆病（おくびやう）神（がみ）ともいふ人おそるゝ事あれば身（み）戦慄（せんりつ）してぞつとする事ありこれは神のゑりもとにつきしく

骸骨
慶運法師 骸骨乃絵賛に

天井下

むかし茨木童子ハ綱が伯母と化して破風をやぶりて出
今この妖怪ハ美人にあらずして天井より落 世俗の諺に
天井みせるといふ事あり かゝるおそろしきめをみする事にや

大禿
伝へ聞彭祖ハ七百余歳
にして猶慈童と称す
是大禿にあらずや
日本にても
那智
高野にハ
頭禿に
歯豁
なる
大禿
ありと云
志かれバ
男禿
ならんか

大首

大凡物の大なるは皆おそるべし わきんや雨夜の星明りに歯黒ぐろとつけたる女の首おそろし

なんとも おそろし

百々爺

百々爺 未詳 愚按ずるに 山東に摸捫窠と称するもの一名野襖といふ 京師の人小児を怖しめて啼を止むるに 元興寺といふ もゝんぐわとがごじと ふたつのことを合せて もゝんぢいと いふならん 野夜ふけて ゆきゝたえ きりとぢ風すごき とき老夫と化して出て [illegible]行旅の人 これに遭へば かならず病むといへり

金霊

金霊ハ金氣なり
唐詩ニ不貪夜識金銀
氣といへり又論語ニも
冨貴在天とあれバ人善事を
なせバ天より福をあたふる事
必然の理なり

あまのざこ
天逆毎
或書云素盞烏尊
猛氣滿胸吐為一
神人身獸首鼻高
耳長雖大力神懸
鼻走千里雖強堅
刀嚙砕作段名
天逆毎姫服天之
逆氣独身而生兒
名天魔雄神云云
摸捫窩主人賛

夫妖ハ徳に勝ずといへり百鬼の
闇夜に横行するハ佞人の闇主に
媚びつく時めくが如し太陽
のぼりて萬物を照せバ
君子の時を得
明君の代に
あへるが
ごとし

鳥山石燕豊房畫

挍合門人
子興
燕二
燕十

安永八己亥春
文化二乙丑年求板

彫工 町田助右衞門

江戸書林
前川六左衞門
本銀町三町目
前川弥兵衞